このPDFは製本直送.com用の原稿です。製本直送.comでのみご利用可能です。

1.

喉が渇いた。

有栖が目を覚ましたのは、ひどい喉の渇きからだった。瞼はまだ開けられず、顔全体に感じる腫れあがったようなむくみに、うめき声だけが漏れた。言葉にすらならない。起きようと身じろぐと、フローリングが背中に痛かった。

ほんの少し動いただけでも不快感が胸からせりあがり、油断すると胃の中のものをその場に吐瀉してしまいそうだった。二日酔いだ。指先は痺れていて、脱水症状の初期段階だと感じていた。かといって上体を起こすのも難しく、久しぶりに味わうひどい二日酔いに、後悔がじわじわと湧き上がってくる。

――なんでこんなことになったんや。

だんだんと起き上がれない状況に飽きてきて、有栖はかろうじて働きはじめた頭を使って昨日のことを思い出そうとした。

雑誌に掲載する予定のコラムを喫茶店で書き上げ、火村にフィールドワークに誘われたのが昨日の夕方のことだ。

ちょうどその日は金曜日で、蓋を開けば事件ではなくて事故だということが判明し、解決した。それで手の空いた捜査一課の刑事、鍋島が食事をしないか誘ってくれたのを切っ掛けに、事件が終わったあとも解散しなかった。事件のあった場所が京都市内の南のほうだったので、それじゃあ車に乗って大阪に出ようという話になって……ぼやけた記憶を少しずつ蘇るのを辿っていくうちに、誰かのうめき声が聞こえた。屍となっていたのは有栖だけではなかったらしい。

「くそ……」

低い声にすぐに誰かはすぐに見当がついた。

同じく床で寝ていた頭が視界に入った。時計の針に例えたら起点に頭を置いて、二人とも火村が一、有栖が六の方向に足を向けているような恰好だった。癖の強い黒髪をこの角度から見るのは新鮮だった。しばらく見ていると、くしゃみが聞こえた。珍しい。

「……なあ、火村。昨日のこと覚えとる?」

すぐ近くにある火村の頭に向かって有栖が聞くと、しばらくの沈黙が落ちた。

「断片的には」

火村が短く答える。

このPDFは製本直送.com用の原稿です。製本直送.comでのみご利用可能です。

「俺も」
お互いに断片的な記憶しかないらしい。火村に関しては酒が自分より弱いという事実を鑑みれば、さもありなんというところだろう。
「うーん……」と新たな唸り声が聞こえてきた。今度は上のほうから聞こえてきたので、頭を動かすと、真横にあるソファで寝返りを打つ姿が見えた。
昨日飲みにいった面子の一人、坂下だろう。彼を叩き起こして水を持ってこさせるには、まず自分が起き上がらなければいけない。有栖は苦心して身体を起こす。手をついたテーブルの上には数えきれないほどのビールの空き缶と、それを灰皿にした痕跡と、見慣れないワインボトルやウイスキーの瓶まで転がっていた。どれだけ飲んだというのだろう。
「……？」
顔を火村に向けて、視界に入った目を疑うような光景に、初めは何が起きているのかよくわからなかった。
パンティー一枚の火村が、床に寝転んでいた。
目を擦り、再び見る。今度は目を凝らしてみたが、一向に現実は変わらなかった。
女物の可憐な白いレースのパンティーが、スラリと伸びる長い脚の付け根から下腹を覆っていた。全裸なら、まだ想像によって空白を埋めることは容易い。しかし、パンティー一枚。思わずその姿を凝視してしまう。薄らと入った腹筋の下、臍の下から生え始めた陰毛は下着の中に収まらず、はみ出している様子が妙に生々しい。膨らみだって普通の下着よりも心なしか強調されているように思える。
華奢な下着によって作られたアンバランスさが、火村の雄を強調しているようだった。間抜けなだけの姿になっていないのが、同じ男として悔しい。
「……なんちゅうカッコしとんねんお前」
まだアルコールが抜けきってないのかもしれない、という一抹の期待を抱いて、有栖はツッコんだ。脳みそが奈良漬になりそうなぐらいに飲んだのだし、ひょっとしたら夢かもしれないという期待も込めて。
「さあ、起きたらこうなっていた」
夢じゃないらしい。
淡い期待をあっさり打ち砕かれても有栖はへこたれなかった。伊達にいつも推理を外しては火村に完膚無きに打ちのめされ続けていないのだ。
「まさか女装趣味」
「じゃないのは普段の下着姿を知ってるお前が一番よく知

このPDFは製本直送.com用の原稿です。製本直送.comでのみご利用可能です。

っているだろう」
火村は慌てた様子もなく、淡々と言う。
そして、彼の言うとおりなので有栖は口を噤んだ。二日酔い明けにはなかなか受け入れがたい光景に、喉の渇きも忘れてしまっていた。
「……とりあえず、坂下くん起こそうか」
もしかしたら何か知っているかもしれないし、という期待の矛先を彼に向ける。当初の目的も忘れかけながら、ふたり揃って坂下を見て、またも目を疑うような姿に固まった。
寝苦しそうにする坂下の腕はひとつにまとめられて、手首には手錠が輝いていた。しかも前髪がちりちりに焦げている。癖毛というにはあまりにも縮こまりすぎていて、不自然なパンチパーマがかかっているような状態だ。
よく見ると安っぽいおもちゃの手錠だったが、彼の動きを阻害するにはじゅうぶんだ。しかも手錠をつけて狭いソファの上から落ちないようにする姿は同情すら覚えてしまう。リビングの床で寝ていた、二日酔いになっただけの自分がずいぶんとマシに思えてくる。
「鍵、どこにあるんやろ」
「さぁ……」

謎は解けるが、鍵なしでは錠は開けられない名探偵はというと、下着一枚で煙草を探していた。まずはお前のパンツを探せと言いたい気持ちをぐっと飲みこむ。これ以上なにか言うと別のものを吐きそうだった。早く太田胃散を飲みたい。そして熱いしじみの味噌汁と。
丸まった服の中から煙草のパッケージを見つけた火村は、煙草を咥えて火をつける。有栖はしゃがみこんで、まだ分解しきれていないアルコールでぐらぐらとする頭を押さえて見ていた。もはやツッコミを入れる気力も、ない。
煙を深く吸いこんで、最初の一口で満足した火村が坂下の頬を軽く叩く。眉を寄せてうなされている体の彼の瞼が震える。その顔に煙草からできる灰がぱらぱらと落ちていくのを眺めた。
「うわっ、あち！　あっつ！」
リアクション芸人も真っ青な反射速度で坂下が飛び起きた。
「えっ、なにこれ、えっ?!」
「落ち着け坂下くん」
「火村さ、えええ?!」
今日一番の絶叫が響いて有栖は頭を押さえた。
「坂下くん、ほんまそれやめて、響く……」